



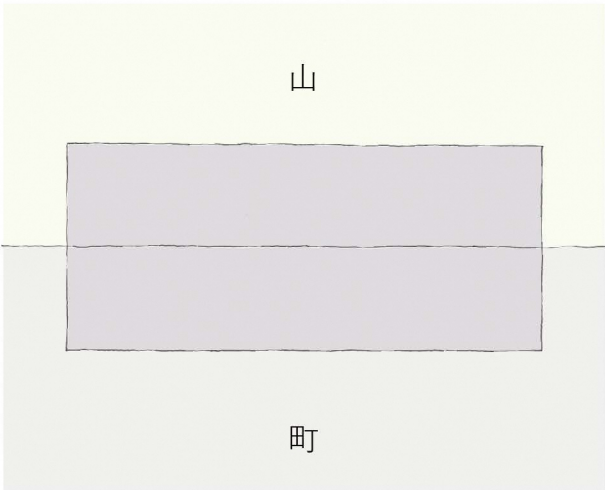
裾野に景色をつくる家

設計概要

豊かな自然風景に囲まれながらも、都市と繋がりながら暮らしていくために、敷地は京都にある山裾を想定している。山と町の境目という敷地の状況を端的に表した、心地よい単純さがありながらも、その中に窓や縁側、その先にある庭などの景色が多様に織り込まれたような、多様な風景による豊かさを併せ持つような住宅を考えた。

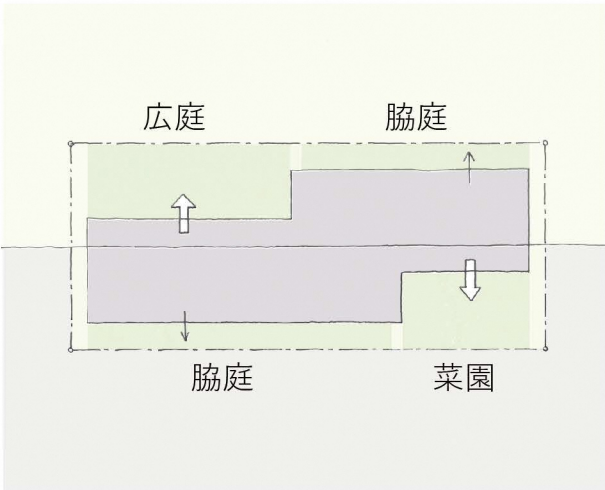
□平面計画

①



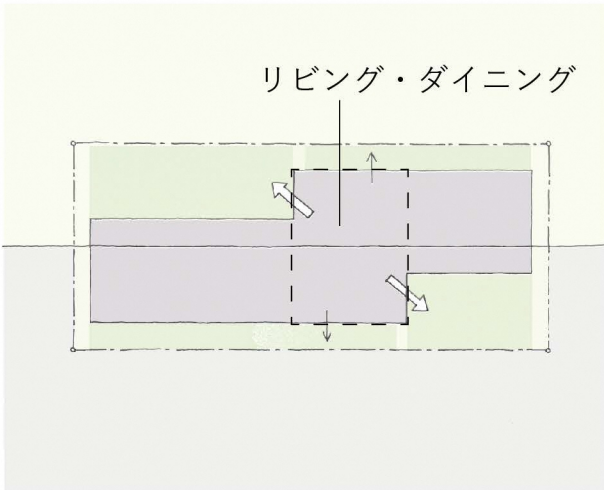
山と町の境目に横長のボリュームを置くことで、敷地に沿った家の概形をつくる。

②



ボリュームを切り欠いて、それぞれ公私の性格を持つ4つの庭をつくり、多様な景色を生む。

③



家の中心となる空間からは、異なる4つの庭の景色が全て見渡せるようなつくりとする。



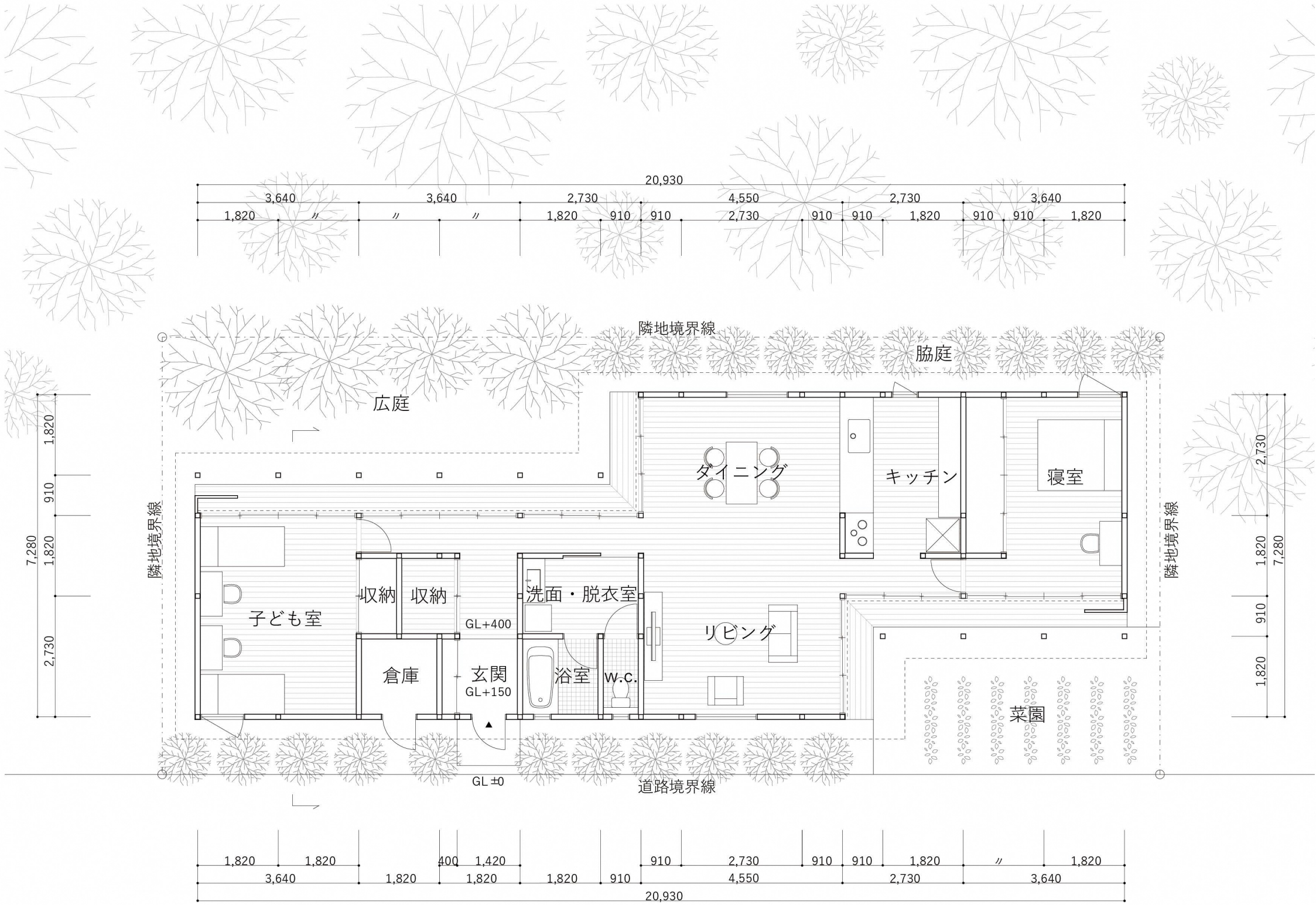
広庭



脇庭



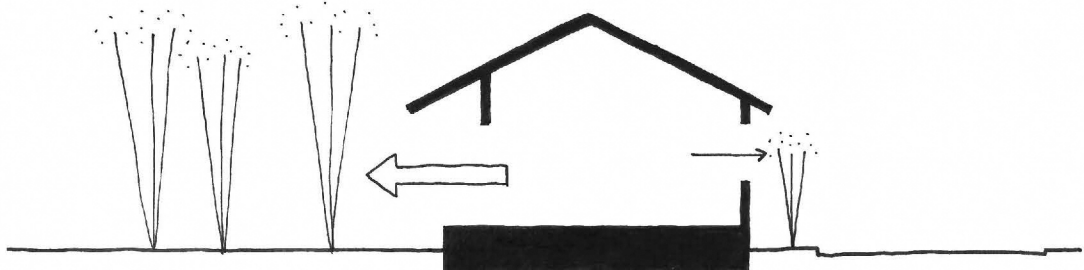
菜園



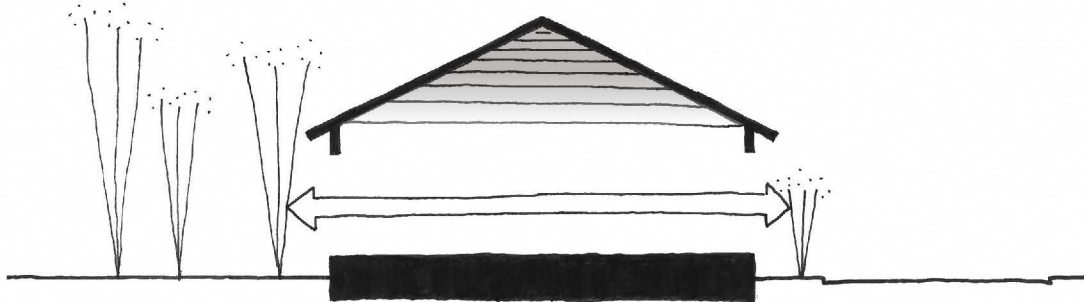
敷地面積：約 220m² 建築面積：約 110m²

0 1 2 5m 平面図 S=1:100

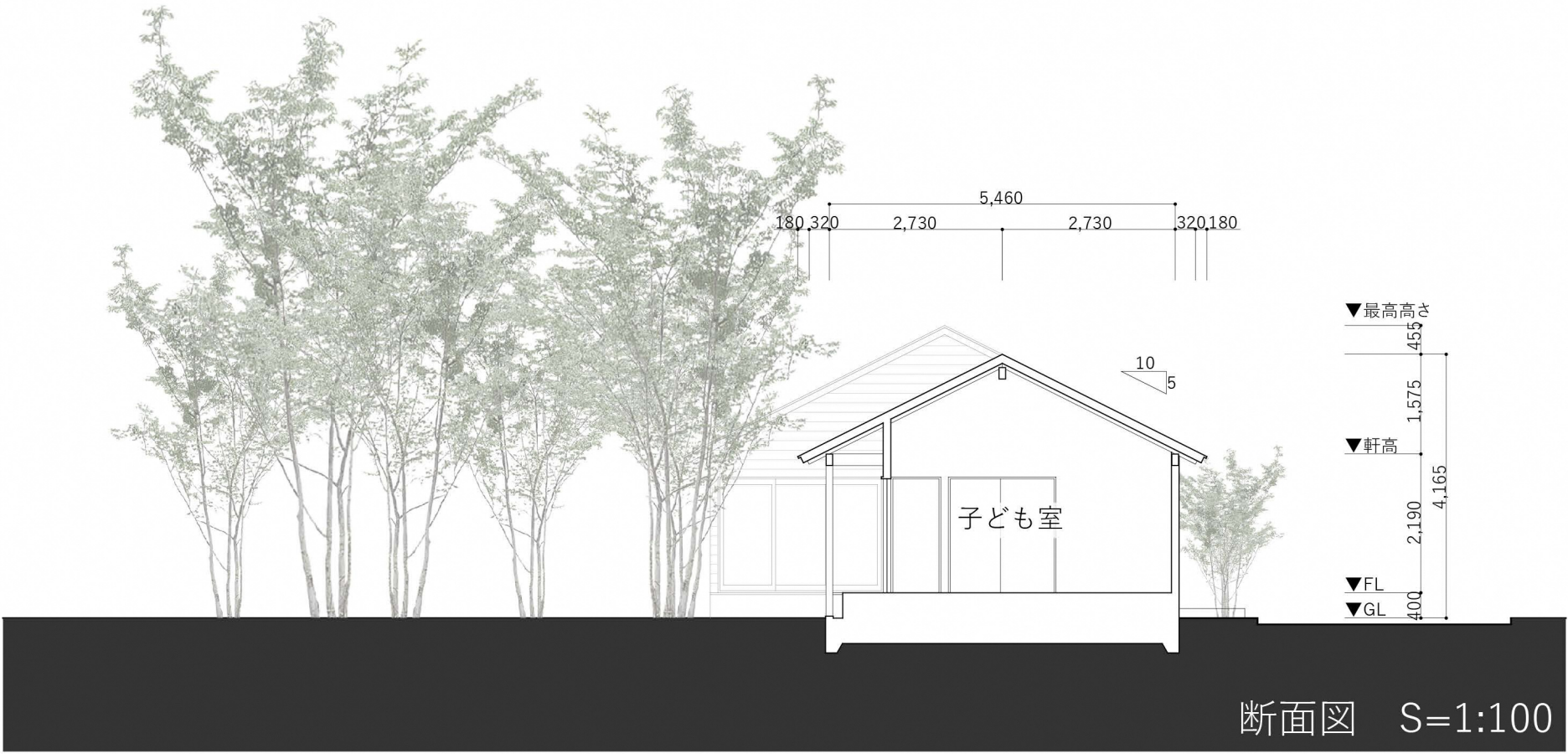
□断面計画



パブリックな庭側には全面開口と縁側を、プライベートな庭側には壁に窓を開ける。景色を楽しむための2つの装置を庭の特性に合わせて配置していく。



家の中心のリビング・ダイニングは、縁側と窓という2つの装置を通して性格の異なる全ての庭が見渡せる、開放的な空間となる。また、棟の位置を他の部屋よりも高くすることで、屋根裏に暗さが生まれ、開口の先の庭の緑がより明るく感じられる。

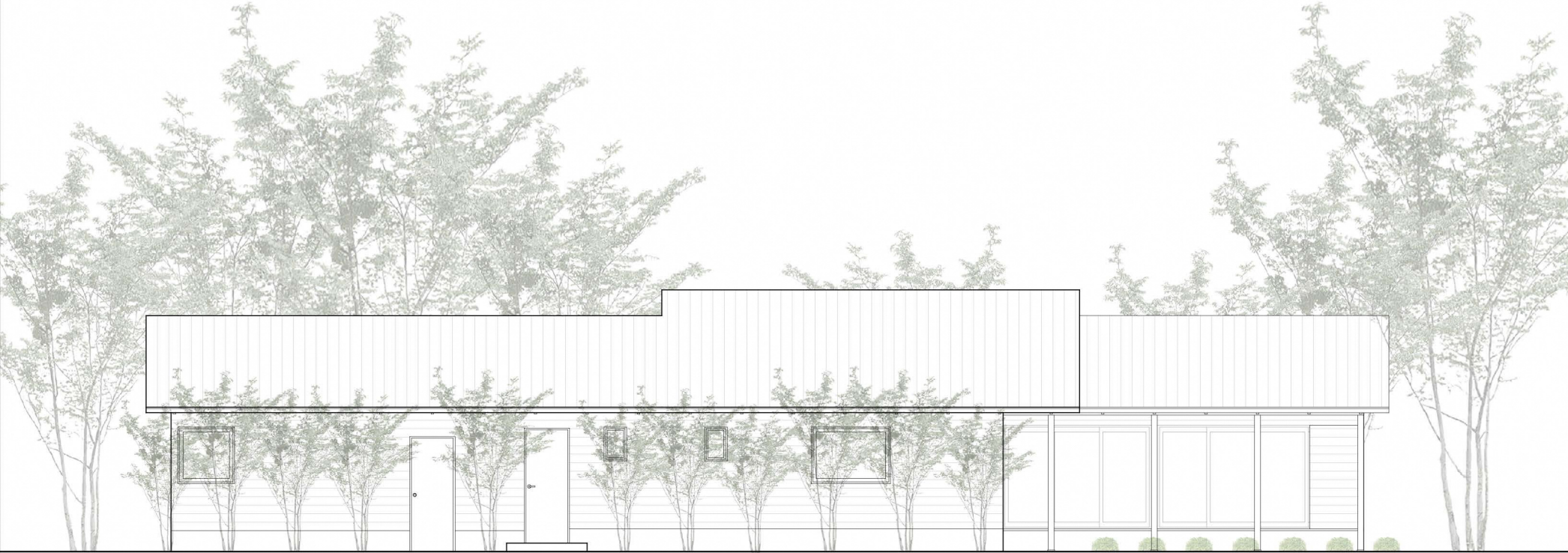
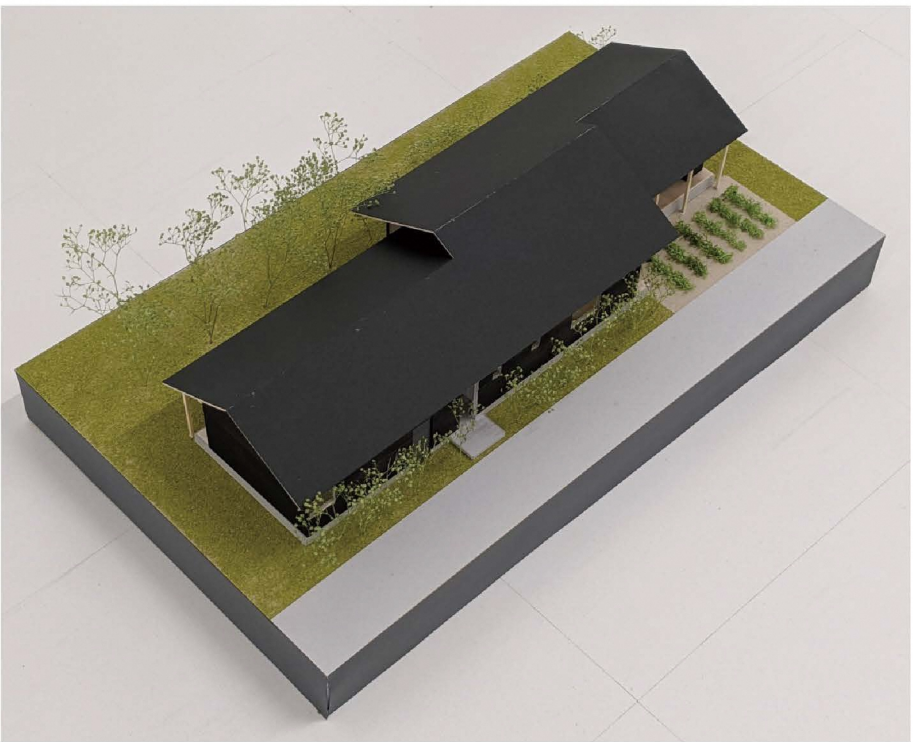
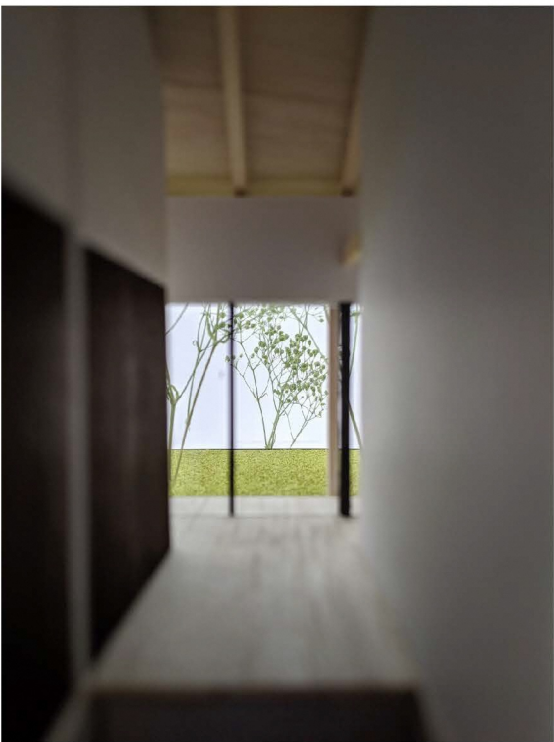


□構造・素材

短手方向のスパンが変化する計画であるが、勾配を保ったまま切妻屋根の棟の位置をずらすことでこれに対応する。これによって、それぞれの部屋のスケールに合った天井高を実現する。また、主要居室内では垂木を現しとすることで、十分な天井高を確保すると同時に、約2000mmと低い軒先高さを実現し、落ち着いた縁側空間をつくっている。

外装は耐久性が高く、西日本で伝統的に使われてきた焼杉を使用する。内装では木の温かみを感じられるよう無垢材を使用し、雨にさらされやすい縁側部分の床と柱には耐水性の高い桧を、室内では調湿機能に優れている杉を使用する。

□外観・内観



南立面図 S=1:100

東立面図 S=1:100